

研究資料

リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」における ピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察

山口 雅 敏

はじめに

ショパン、リストが活躍した19世紀後半は、ピアノ演奏技巧が飛躍的に進化した時代で、超絶技巧を駆使した作品は、ヴィルトゥオーゾ音楽と呼ばれる様になった。又、コンポーザー＝ピアニスト（作曲家兼・演奏家）の黄金時代であり、聴衆に自らの技巧を示す為、当時人気のあるグランド・オペラなどのピアノ編曲を行う事に飽き足らなかったのである。聴衆は演奏者の超絶技巧に、電流が流れるようなスリルを求め、演奏者は、聴衆を制服する事への欲求に駆られながら、次々と編曲を編み出して行ったのである。

こうした中で、ロマン派ヴィルトゥオーゾ音楽家の金字塔と言うべき存在が、ロシア出身の大ピアニスト、ヴラディミール・ホロヴィッツである。ホロヴィッツが録音で演奏した自身の編曲の数々は、一部のピアニストや音楽愛好家の間で、カルト的な人気を博している。ホロヴィッツは、自身の編曲を楽譜として公表しなかった為、かえってその神秘性は高められた。私は、ホロヴィッツの録音から採譜し演奏する事によって、彼の編曲とピアノ技法の謎の部分に迫ってみる事を試みた。またリストからホロヴィッツまでの時代の流れの間に、ピアノ演奏技法の進化と共に、どの様な編曲技法が編み出され発展して行ったのだろうか。そして、それらの編曲は聴き手にどの様な印象と効果を与える事となったのか、考察してみる。

1. ピアノ編曲とは

そもそもピアノ編曲がなされるようになったのは、19世紀前半までは、今日と違ってまだまだ、オーケストラ作品やオペラなど大規模な編成の作品を簡単に耳にすることが困難であった為である。そこで当時演奏の舞台の中心であったサロンでの演奏が可能な様に、これらの大曲をピアノ独奏や連弾用に編曲して演奏されていた。又、編曲された楽譜が求められたのである。編曲を意味する語のトランスクリプションの原義は「書き写し」である。つまり別の演奏形態に移し替える事である。

ひとえにピアノ編曲と言っても様々な形態がある、フルートやヴァイオリン、オーケストラ曲をピアノで演奏する為の編曲や、作曲家がオーケストラ曲や室内楽作品などを作曲する際に「ひな型」として成立したピアノ連弾版や2台のピアノ版がある。作曲家が先ず、オーケストラなどの作品をピア

ノ版として作り、実際にピアノで演奏し試行錯誤して作り上げた作品を、オーケストレーションに作り変えるといった方法の為の編曲である。例えばブラームスの「2台のピアノのためのソナタへ短調作品34 a」は「ピアノの五重奏曲へ短調作品34」の「ひな形」として作曲された作品である。

こうして始まったピアノ編曲はやがて、リストやタールベルクの出現により、「トランスクリプション」「パラフレーズ」「ロンドー」「即興曲」「カプリース」「変奏」「回想」などの名称のもとで、流行のオペラの旋律や歌曲が、創意工夫の満ちた華麗な技巧が盛り込まれ、新たな形として確立していくのである。

2. リストのピアノ編曲について

19世紀最大のコンポーザー＝ピアニストであるリストは、ピアノという楽器をオーケストラ的に考え、オーケストラを実に見事にピアノの中に移し取った最初の音楽家である。リストは多数の自作品の編曲を行い、メフィストワルツ第1番、波を渡るパウロの聖フランシス<2つの伝説より第2曲>、愛の夢第3番など、リストの最も著名なピアノ曲はオーケストラ曲や歌曲のピアノ独奏編曲である。リストのピアノ書法の中に、オーケストラの色彩が潜在しているのを感じる。リストは自身の作品への編曲だけではなく他の作曲家のオーケストラ、歌曲、オペラ作品の膨大な量の編曲を行っている。特に1835年から着手し、1865年に出版されたベートーヴェンの交響曲全9曲の編曲は、ピアノ音楽史における偉業である。リストの編曲作品の譜面には、難しいフレーズの部分になると、より平易な奏法がOssiaとして併記されることがある。演奏者の技量によって選択出来るという、リストの配慮が見える。このOssiaはリストの他の作品の多くにも登場する。又、友人であったベルリオーズが作曲した「幻想交響曲」のリストが行ったピアノ編曲においては、オーケストラの原曲よりもリスト自身の演奏でのピアノ編曲の方が、原曲よりも効果的で、この作品の知名度を高める事になったというエピソードが残されている。

リストの編曲は単にオーケストラからピアノへの移し替えでなく、演奏会用のパラフレーズとして、ピアノ音楽での地位を高めたのである。又、リストはピアノという楽器の持つ音響効果を巧みに利用した。上下への鍵盤を駆け巡るアルペッジオや連続する急速なオクターブパッセージ、両手の交差での技巧が聴き手に与える効果は非常に高い。又、リストがピアノ編曲に用いたこれらの技巧は、手の機能生理にうまくはまる様に作られているのである。

そしてこういった超絶技巧でもって聴き手を誘惑させる、ヴィルトゥオーゾ編曲は、コンポーザー＝ピアニストによって受け継がれ、大衆の前で演奏するという、リストが始めたリサイタルという形式が常識となるにつれ、益々と演奏効果を求めた。聴き映えのするピアノ編曲は、より巧妙な「技」を生み出して行くのである。

リストが編み出した超絶技巧を用いた編曲、そしてその極めて刺激的な技巧によって聴衆を唖然とさせ、一瞬にして魅了させる編曲をヴィルトゥオーゾ編曲という言葉に置き換え、位置付けたが、次の章ではリストと共に新たな編曲技法を編み出した、シギスモンド・タールベルク（1812-1871）に

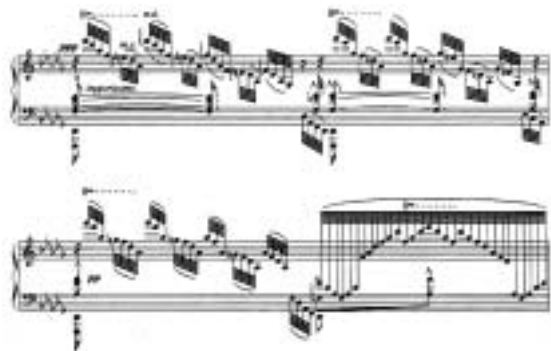
リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」におけるピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察について触れてみたい。

3. ヴィルトゥオーゾ編曲の進化と、タールベルクのピアノ編曲

タールベルクはリストの最大のライバルと言われている。当時の彼はその圧倒的な技巧で名声を得、聴衆を魅了し、ショパンやリストなどをはじめとする多くの音楽家達に影響を及ぼしていた。パリではたちまち「タールベルク派」「リスト派」の真っ二つに分かれていたそんな中、1837年3月31日に、ベルジョジョーゾ王妃がイタリア難民の救済の為の慈善演奏会で、タールベルクとリストを自分のサロンに招いたのである。「音楽新聞」はプログラムを発表し、記事にはく疑いもなく、最大の興味にその対立が今日の音楽界を揺り動かし、ローマとカルタゴの様に優劣のつけがたい二人の才能が一堂に会することにある。リスト氏とタールベルク氏は交代にピアノに向かう予定になっていると書かれている。その結果は、どちらも聴衆から絶賛を得て、タールベルクは「世界最高のピアニスト」、リストは「唯一のピアニスト」と評された。当時の音楽界が、この2人の才能に注目していた事を知る、興味深いエピソードである。

この「ピアノ対決」の際にリストは自身が編曲した、パチーニの歌劇「ニオペ」の主題による幻想曲。タールベルクも自身の編曲であるロッシェニの歌劇「エジプトのモーゼ」の主題による幻想曲作品33を演奏している。この編曲作品から、タールベルクが発展させた、ピアノ演奏技法の追求を知る事が出来る。その特徴は、左手で和音伴奏を、右手で4オクターブの分散和音（アルペジオ）を弾きつつ、各々の手で隙を見ては主旋律を弾き歌わすという手法で、聴き手にはあたかもこれが「3本の手」で弾かれている様な幻影を生み出すのである。

譜例 1



この手法は「トリック」という奏法と名付けられており、タールベルクは「3本の手を持つ」と言われていた所以である。譜例1はタールベルク編曲「埴生の宿」～イギリス風アリア、作品72からの譜面である。この曲においてもタールベルクは「トリック」奏法を用いている。イギリス民謡である「埴生の宿」の旋律を取り囲む様に、アルペジオが散りばめられている。

「トリック」奏法は難しいものではないが、実際よりも難しく聴こえ、1830年代では全く新しい奏法であったので、大きな反響を呼んだ。タールベルクの演奏の際には聴衆は興奮し、彼がどの様に弾いているのか見ようと、席から立ち上がったとの事である。

次の文章は「新音楽新聞」に載った、シューマンによるタールベルクのロッシェニの歌劇「エジプトのモーゼ」の主題による幻想曲に対する批評である。この批評からタールベルクの独創的な編曲技

法が、当時の聴衆に魔法をかけ虜にさせた事実を知る事が出来る。

＜この幻想曲は聴衆を征服する為のすべての手段と武器をヴィルトゥオーゾに手渡してくれる。例えば、一瞬で心を捉え、緊張して耳を傾けさせずにはおかない始まり、ヴィルトゥオーゾ風の力強い箇所、優雅なイタリア風旋律、魅力的な間奏と穏やかな休息の箇所。そして最後に、上に述べたファンタジー [高名な「タールベルクのハープ」の技巧による「3本の手」の効果を用いたフィナーレ] による締めくくりが来る。＞

こうした秘法とも言える「トリック」奏法は実に見事な、合理的な仕掛けに支えられており、それは奇術師が手品芸で仕込むような「タネと仕掛け」に近いものがある。タールベルクやリストの作るヴィルトゥオーゾ編曲においては、この「タネと仕掛け」が巧妙に仕込まれており、それらは聴衆の眼前で驚かせる効果を発揮させる。ヴィルトゥオーゾ編曲の持つ最も魅力的な奇跡を作り上げるには、この「タネと仕掛け」を見破られない様に「演じる」技も弾き手には求められるのである。

4. モーリツ・ローゼンタールのピアノ編曲と、ヴィルトゥオーゾ編曲の後継者達

ヴィルトゥオーゾ編曲は、リストとタールベルクの出現と共に、コンポーザー＝ピアニストのある種の伝統として、19世紀も終わりを向かえる時に全盛期を迎える。そして、当時のヴィルトゥオーゾ・ピアニストのレパートリーに頻繁に取り上げられた。

リストの最晩年の弟子の一人であった、モーリツ・ローゼンタール (1862-1946) もありとあらゆる華麗なピアノ技法を自身の編曲に散りばめた。ローゼンタールはシュトラウスの編曲作品を残している。この編曲に用いられた手法の特徴は、シュトラウスの作品から3つの主題を選んで、それらを上手に組み合わせると言った事である。

譜例 2



譜例 2 は＜ウィーンの謝肉祭～シュトラウスの主題によるユーモレスク～＞である。右手で「こうもり」と「カリオストロ・ワルツの第1ワルツ」を同時に演奏するという手法が用いられている。又、＜シュトラウス幻想曲「美しき青きドナウ」「こうもり」「人生の喜び」による幻想曲＞では、「こうもり」と「人生の喜び」を同時に、「美しき青きドナウ」と「こうもり」の主題による同時進行が登場する。更に、その複数の旋律に複雑なパッセージが加わるのである。この手法はローゼンタールの編曲技法の真骨頂である。一見、演奏不可能な芸当に聴こえるが、かなり複雑な手のポジション移動や、両手の和音が複雑に交差する箇所においても、手の機構に抜かりなく計算に入れて書かれている。

リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」におけるピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察

ここにも奇術的な奇跡の奏法が存在する。かくしてヴィルトゥオーゾ編曲には絶えざる技術革新が要求された。先に挙げたシュトラウスの作品による編曲だけでも膨大な数がある。いくつかを挙げてみる。

カール・タウジツヒ（1841-1871）：「新しいウィーンの夜会～ヨハン・シュトラウスによるワルツ・カプリス」

アルフレード・グリュンフェルト（1852-1924）：「ウィーンの夜会作品56～ヨハン・シュトラウスのワルツの動機による演奏会用パラフレーズ」「皇帝円舞曲」

アドルフ・シュルツ＝エヴラー（1852もしくは1854-1905）：＜ヨハン・シュトラウス「美しき青きドナウ」の主題によるアラベスク＞

エドゥアルド・シュット（1856-1933）：「ウィーンの森の物語」

レオポルド・ゴドフスキー（1870-1938）：「こうもり」「芸術家の生涯」「酒、女、歌」「宝石のワルツ」

エルンスト・ドホナーニ（1877-1960）：「宝石のワルツ」「親しい仲 Du und Du」

イグナツ・フリードマン（1882-1948）：「春の声」

マックス・レーガー（1873-1916）：「美しき青きドナウ」による即興曲

ジョルジュ・シフラ（1921-1994）：「美しく青きドナウ」「こうもりによるパラフレーズ」「ジプシー男爵によるパラフレーズ」「トリッチ・トラッチ・ポルカ」

リスト、タールベルクらから始まったヴィルトゥオーゾ編曲は益々、超絶技巧と「トリック」奏法が要求され、発展しエスカレートしていった。

5. その後のヴィルトゥオーゾ編曲

20世紀になり、多くの作曲家はどの楽器もまともに演奏せず、またほとんどの演奏家は作曲をしなくなっていった。作曲には時間がかかり、質の高い演奏を聴衆の前で弾く音楽家は、演奏家と呼ばれた。音楽家としての役割が分離していったのである。その様な音楽界の変化と共に、ピアノ演奏における「真正性」の追求や、単術的な解釈が中心となり、楽譜の書かれた音符のみを信じ、それは作曲家に対する尊敬になった。作曲家の楽譜を神聖視する様になり、19世紀後半の編曲作品は、一部の例外的な演奏家を除けばかなり退潮せざるを得なかった。やがて、その多くは忘れ去られて行ったのである。こうした20世紀の音楽界の風潮の中で「失われた過去・伝統」を再度創出・演出しようとした音楽家が、20世紀最大のピアニストである、ヴラディミール・ホロヴィッツ（1903-1989）である。

ホロヴィッツも19世紀のコンポーザー＝ピアニストの様に、作曲も行ったが、彼の天職はピアノ演奏であった。しかし作曲のはげ口は、生涯にわたり突発的に、十数作にのぼる極めて優れたピアノ編曲という形で現われた。評論家によっては、こういった編曲を俗悪な自己顕示のひとつの形態とみた者もいたが、ホロヴィッツは、オーケストラ作品やオペラをピアノ演奏用に編曲する事は19世紀にはごく当たり前の事であったと反論し、その伝統に回帰しているにすぎないと言った。次にホロヴィッツ編曲作品について述べてみる。

6. ホロヴィッツ編曲について

ホロヴィッツが1941年から52年までの11年間に、聴衆が彼の驚異的なピアノイズムに心を奪われているのに乗じて、次から次へと編曲を編み出し発表していった。その中には、これまでに述べたコンポーザー＝ピアニストたちの編作曲というより、一部改変での演奏が多い。モシュコフスキーの小品等の演奏でも同様である。

以下が、ホロヴィッツの編曲作品である。(編曲を「＝」と記述する。)

ビゼー：「カルメンの主題による変奏曲」(1926年，28年，48年，57年，68年，78年の複数の版が存在する。)

サンサーンス＝リスト：「死の舞踏」(1941年)

シューベルト＝タウジツヒ：「軍隊行進曲」(1942年)

スーザ：「星条旗を永遠なれ」(1945年)

ミス：「アメリカ国歌」(1945年)

メンデルスゾーン＝リスト：「結婚行進曲の主題による変奏曲」(1946年)

ムソルグスキー：「展覧会の絵」，歌曲「水辺にて」(1947年)

リスト：「波を渡るパオラの聖フランシス」(1947年)

リスト：ハンガリー狂詩曲第15番「ラコツィーマーチ」(1949年)

バラキレフ：「イスラメイ」(1950年)

リスト：ハンガリー狂詩曲第2番(1952年)，ハンガリー狂詩曲第19番(1962年)

スケルツォと行進曲(1969年)，ハンガリー狂詩曲第13番(1969年)

ユーマンズ：「二人でお茶を」(1962年)

リスト＝ブゾーニ：「メフィストワルツ第1番」(1978年)

ホロヴィッツは、自身の手にも可能な技巧的で至難な編曲に仕立て上げる事によって、リストの編曲技法をしのごとく試みたのである。ホロヴィッツの編曲作品は、リストですら想像が及ばなかった空前絶後のピアノイズムが縦横に駆使された驚異的なものである。彼の編曲に用いた手法の特徴として、これまでに編み出されて来た、ターレルクによる「トリック」奏法、ローゼンタールによる複数の旋律による同時奏法などを取り込みながら、更に巧妙に仕掛けている。ホロヴィッツが創造した編曲技法は、これまで以上に最小で最大の効果を出したのである。

ホロヴィッツの全編曲を、幾分なりとも正確に採譜することが出来た、ピアニストのアーサー・マッケンジーは、ホロヴィッツについて「恐らく、当時最大のコンポーザー＝ピアニストであったであろう。ラフマニノフを除いては、ピアノという楽器をこれほど慣用的に把握していた者は他にいない。彼は自分の編曲作品を金庫に納め、それを出版しない事によって末代まで最大のピアノ名手としてその名が残る事を信じた。なぜなら彼がどういう風に何をやったかは、誰にも分からなかったし、楽譜がなければ、弾いてみる事だって出来ないからである。」と語っている。ホロヴィッツは自身の編曲に、一体どの様な演奏技巧や「トリック」奏法を用いて、リストをしのごとく目指したのか、採譜さ

リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」におけるピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察

れた譜例と共に、謎解きを行ってみる。

7. ホロヴィッツの編曲技法

I. トリック奏法

先に、タールベルクが編み出した、「3本の手」を使って演奏しているかの様に奏する「トリック」奏法について述べたが、ホロヴィッツはタールベルクが用いたよりも、更に高度な「トリック」奏法を用いている。この奏法についてジャンケレヴィッチは次の様に述べている。「2つの親指だけで旋律を描き出すには十分であり、その間、雄大な走句がこの旋律のまわりで渦をまく。このような左右の手の協働が、第3の手が存在するかのような印象を与えるのである。」

譜例 3



譜例3はホロヴィッツの編曲作品の中で最も有名な、スーザ＝ホロヴィッツ「星条旗よ永遠なれ」である。この編曲は瞬く間に聴衆の心をつかみ、ホロヴィッツの「主題曲」となったが、同時に、彼の編曲行為は芸術的妥協とみられるようになってしまった。この編曲でホロヴィッツは「トリック」奏法を多用している。中音部では、両手の親指で主題旋律をカウンタービレで奏でながら、残りの指で低音部の伴奏と、高音部でのハーブのような装飾を紡ぎ出している。

譜例 4



譜例 5



譜例4はホロヴィッツ編曲の中で最も名高い部分である。右手はピッコロのパートを、左手はバスを担当しながら、譜例3と同様に、一瞬手が空いた隙に、両手の親指が交互に主題旋律を奏でる。この箇所を演奏するには、10度は届く大きな手と、正確な跳躍の技巧が求められる。譜例5は、譜例4のピッコロのパートを重音にし、主旋律は和音となっている。豪華華麗な響きが生み出されると共に、更に高度な技術が必要である。そこには「3本の手」が存在していると思えない、巧妙な仕掛けがある。

この「トリック」奏法を用いて、ムソルグスキーの「展覧会の絵」の終曲、「キエフの大門」の最後の終結部分で、ホロヴィッツは豪快に鳴り渡る鐘の動機を付け加えている。中音域に主題の和音を奏し、低音と高音で痙攣する様な両手での複雑なトレモロによる壮大な大音響により、ピアノがオーケストラへと化する。ある評論家は、この追加箇所を指して、「ホロヴィッツは音響そのものが宿す力によって、この曲に圧倒的な締めくくりを付けた。これほどの音楽がひとつの楽器から流出すること、2本の手であれだけの音符をまかなえることは、信じがたい気がした。」と述べている。この箇所は、ターレベルクの編み出した「トリック」奏法を、究極に発展させた形である事を物語っている批評である。

II. 両手の交差

リストの編曲にも多く見られる奏法である。ジャンケレヴィッチはリストの用いたこの奏法について、次の様に述べている。

<創造的なエネルギーの驚くべき浪費のなかには、逆説的なことにも経済的な両手の使用があるのであり、これは相対的な最小の手段でもって最大の力強さと充実とを手に入れる為のものである。>

譜例6 リストの原曲

譜例7 ホロヴィッツによる編曲

リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」におけるピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察

ホロヴィッツもこの奏法を多用している。見かけの難しさに反して合理的・効果的に考えられている。リストはショパンのスケルツォ第1番変ロ短調作品20、最後の両手ユニゾンによる半音階を、効果的な、オクターブの両手交差による半音階に変更して演奏したが、ホロヴィッツもそれに倣って演奏している事が興味深い。

譜例7は、リストのハンガリー狂詩曲第2番をホロヴィッツが編曲した終結部である。

リストは、効果的な両手オクターブでの交差をここで用いているが、ホロヴィッツは、リストの原曲の譜例6、17小節目から、改変と追加を行っている。リストの手法に習って両手の交差を多用し、更に和音の連打が加わっている。上下するパッセージの連続に、幾度と無く高揚は頂点を迎える。複雑な音での両手の交差によって豪快に、この作品を締めくくっている。リストですら、ホロヴィッツの創造性と超絶技巧に息を呑んだであろうと、言わしめる編曲作品である。この編曲は、ホロヴィッツの編曲作品の中で、彼自身が最も演奏困難であると語っている。

Ⅲ. 同時に奏される複数の旋律

リストのハンガリー狂詩曲第2番の編曲の、終結部近くでは、この作品の主要となる3つの旋律を同時に対位的に絡ませている〔譜例8〕。この手法は、先に述べたローゼンタールを始め、グリェンフェルト、ゴドフスキーらの多くの編曲でも見ることが出来る。ホロヴィッツもこの手法を取り入れている。

ホロヴィッツはこの箇所について、音楽評論家アーヴェング・コロディンに説明するにあたって、「リスト原曲の和声は一つも変えていないし、主題も元通りだけど、私のやった事を聴いて欲しい。」と実際に演奏し啞然とさせた。

譜例8

The image shows a musical score for piano, consisting of four systems of staves. Each system has a treble and bass clef staff. The music is in a complex, rhythmic style with many sixteenth and thirty-second notes. The score is written in a key signature of two sharps (D major or F# minor) and a 2/4 time signature. The notation includes many slurs, ties, and dynamic markings. The overall impression is one of technical complexity and dense harmonic texture.

高音部で2つの主題旋律を奏でながら、更に最低音にもう1つの旋律が加わる。3つ目の旋律が加わっても、テンポを落とさず平然と演奏する「演出」もここでは求められる。ホロヴィッツのこの編曲作品について「ミュージカル・アメリカ」誌は、「音楽としては問題なくリストの原曲の方が優れているが、この演奏を聴いて、ホロヴィッツ氏がその曲を手前勝手に扱ったとして、同氏と口論する気になる者はいないだろう。」と語った。

ホロヴィッツの仕掛けた奇術が、聴衆を驚嘆させた事を知ることが出来る。

IV. 音の省略とパッセージの簡略化

ホロヴィッツはピアノの鍵盤配列を見事に応用した。例えば、上や下に奏する半音階のパッセージがあると、彼はそこそこで音を抜かし、演奏を楽にして、響きを鮮明にさせた。

譜例 9

譜例9は、メンデルスゾーン＝リスト「結婚行進曲」の編曲である。3度の連続パッセージも、音を抜かし所々を単音にする事により、驚くほど演奏が容易になる。音を抜かしても聴衆の耳には分らない事、すべての音符を一つ一つ弾くよりも、リズムの前向きの力や音の明瞭さを重視した。

譜面9は、メンデルスゾーン＝リスト「結婚行進曲」の編曲である。3度の連続パッセージも、音を抜かし所々を単音にする事により、驚くほど演奏が容易になる。音を抜かしても聴衆の耳には分らない事、すべての音符を一つ一つ弾くよりも、リズムの前向きの力や音の明瞭さを重視した。

譜例10

譜例10は、ビゼー「カルメンの主題による変奏曲」の冒頭である。2小節目の重音の連続も、旋律の一部を左手で取る事によって、驚くほど容易に演奏する事が出来る。ホロヴィッツは、この様な音の簡略化を随所で工夫した。

譜例10は、ビゼー「カルメンの主題による変奏曲」の冒頭である。2小節目の重音の連続も、旋律の一部を左手で取る事によって、驚くほど容易に演奏する事が出来る。ホロヴィッツは、この様な音の簡略化を随所で工夫した。

V. 効果的なオクターブの連打

譜例11

譜例11は、ホロヴィッツがリストのハンガリー狂詩曲第15番の為に作った、カデンツ部分である。鍵盤の端から端まで、入りくんだオクターブの連続が駆け巡り、厚い音の層が轟き渡り、勝ち誇った様な締めくくりの部分では、低音の音はほとんど聞き分ける事が出来ないほどである。ホロヴィッツは恐ろしく力強い音の波を作り出し、更にペダルの操作で響きを増幅させた。

ホロヴィッツはこの様な強音の続く箇所においてもソフトペダルを使用し、頂点に達する時にソフトペダルを開放し、一瞬に響きを膨らませるといったペダリングを頻繁に使用した。ピアノという楽器が作り出す倍音の特性を利用したのである。オーケストラ的な音量を作り出す術を知り尽くし

リストからホロヴィッツまでの「ピアノ編曲」におけるピアノ技法の進化と、演奏効果についての考察

ていた、ホロヴィッツならではの豪快なカデンツである。

この編曲作品について「ニューヨーク・タイムズ」紙は、リストの原曲に、ホロヴィッツはベルリオーズによる管弦楽版を加味したとし、更に「全く想像の及ばなかったような、彼自身の創意から生まれた華麗極まりない変化の様々をそこに付け加えた。」と批評した。

8. ホロヴィッツの編曲技法のまとめ

ホロヴィッツが編曲にかかると、例えリストほどの超絶な作品であっても、オクターブの連続は轟き渡る和音の連続となり、音階は、重3度や6度の連続となった。音の層は厚みを増し、高音のパッセージは派手に飾られた。又、主題やリズムを立体的に引き立てる為に、内声部に新しい旋律を付け加えるなど、想像の限りの技巧を盛り込んで行ったのである。ホロヴィッツは主題の上にくら音が積み重なっても、主題と同じ速度で、その曲が演奏出来る事を、実演の度に証明した。自身の編曲によって己の超絶技巧をアピールしたのである。

しかし演奏不可能だと聴こえる箇所でも、実際に弾いてみると、箇所によってはリストの原曲よりも技巧的に楽に工夫されており、演奏効果はリストのそれよりも上まっている。そこには、これまでの章で述べてきたホロヴィッツの編曲技法という「タネ」が仕掛けられているのである。

ホロヴィッツは自身の編曲を楽譜として出版しない事によって、他のピアニストに彼の編曲を弾かれる事もなく、編曲の仕掛けられた「からくり」を見抜かれる事もないと、ホロヴィッツ自身踏んでいたのかもしれないと推測する。

9. ピアニストにとってのホロヴィッツ編曲の存在

こうして長年、編曲の秘密が明らかにされなかった事によって、ホロヴィッツ編曲は、ある種のカリスマ的存在となっていた。しかし近年、ホロヴィッツの音源から採譜し、自らの演奏会で披露するピアニストが現れるようになった。(ワレリー・クレショフ、アルカディ・ヴォロドス、アラン・ヴァイス、福田直樹、東誠三氏)更に、世界各地で採譜された楽譜がインターネットなどで流布され(ウクライナでは、オレクシー・コルタコフによる採譜が出版された。)、多くのピアニストや音楽愛好家によって演奏会やコンクール、録音等で披露されるようになった。容易にホロヴィッツの巧妙な「からくり」に触れる事が可能になって来ている。

10. おわりに

リストの出現により、19世紀後半は「ピアニスト黄金時代」でもあり「編曲の黄金時代」でもあった。ヴィルトゥオーゾ作品が次々と生み出されていく中で、編曲という作業が重要視され発展を重ねて来た事について述べてきた。結果、リストやタールベルク、ローゼンタールやホロヴィッツが聴衆

にかける、奇跡的な超絶技巧には計算し尽くされた、実に合理的な奏法を用いての「タネ」が仕掛けられており、そこには聴衆という存在との密接な関係がある事も分った。一流のヴィルトゥオーゾには一流の奇術師に相通じるものがある。

先に挙げてきた、ヴィルトゥオーゾ編曲を演奏する事は、ピアノ演奏の問題と可能性を無限に投げかけてくれると同時に、オペラやオーケストラ、他の楽器の作品のスタイルを知る事が出来、又、オーケストラの響き、声のレガートの音など、幅広く学ぶ事が出来るのではないかと考えた。

優れたピアノ編曲を演奏し、研究する事はピアノ技法の方法論を知る上で、最もな啓示となる事であらう。

20世紀の音楽界は、19世紀の編曲作品は「ヴィルトゥオーゾ的悪趣味」として、演奏の世界から締め出して来たが、このところ急激にその風潮は変化している。ヴィルトゥオーゾ編曲作品の録音CDは何種類も手に取る事が出来るし、楽譜も復刻され出版されている。

そしてアール・ワイルド、シプリアン・カツァリス、マルク＝アンドレ・アムラン、フランチェスコ・リベッタ等、名ピアニストも、過去の編曲技法の伝統にのっとりながらも、各々の新しいスタイルでの編曲を数多く生み出しているのである。


最後に私も19世紀に行われた伝統を尊重しながら、自身がアンコールで演奏する為に作った、短い編曲作品をここで掲載してみたいと思う。リムスキー＝コルサコフ作曲「くまん蜂の飛行」とブルグミュラー作曲「アラベスク」を組み合わせ、この二つの作品を同時に演奏するというファンタジーである。

私なりのユーモアを仕掛けてみた。気軽に演奏し、楽しんで頂けたら幸いである。

アラベスク 蜜蜂の飛行

Fantasy on Arabesque by Liszt after Chopin & The Humble Bee by Rimsky-Korsakoff

Frédéric Scherzade 2-180 山口雅敏 Masahito Yamaguchi



Copyright by Masahito Yamaguchi

2



3

4

©1997
All rights reserved. Printed in Japan. April 2001
This performance may be recorded or broadcasted only with the permission of the publisher.

引用参考楽譜 参考引用文献 参考資料

楽 譜

- Christian Jensen 採譜 1999 ビゼー＝ホロヴィッツ：「カルメンの主題による変奏曲」（未出版）
リスト＝ホロヴィッツ：ハンガリー狂詩曲第2番、第15番「ラコツィーマーチ」（未出版）
メンデルスゾーン＝リスト＝ホロヴィッツ：「結婚行進曲の主題による変奏曲」（未出版）
井口基成 編 1987 フランツ・リスト ピアノ作品集4 春秋社
モーリツ・ローゼンタール 作曲 「ウィーンの謝肉祭～シュトラウスの主題によるユーモレスク～」
カール・フィッシャー出版社
高久暁 著 コンスタンティン・シチュエルバコフ運指 2001 「ヨハン・シュトラウスⅡ世 ワルツパラフレーズ集」 音楽之友
山口雅敏 採譜 1997 スーザ＝ホロヴィッツ「星条旗よ永遠なれ」（未出版）
山口雅敏 編曲 2007 「アラベスクまん蜂」～リムスキー＝コルサコフ作曲「くまん蜂の飛行」とブルグミュラー作曲「アラベスク」によるファンタジー（未出版）

文 献

- ウラディミール ジャンケレヴィッチ著 伊藤制子 訳 2001 「リスト ヴィルトゥオーゾの冒険」 春秋社
岡田暁生 著 2003 「ピアノを弾く身体」 春秋社
グラン・プレスキン著 奥田恵二・宏子 訳 1983 「ホロヴィッツ」 音楽之友社
近藤健児 著 2006 「クラシック CD 遺稿・編曲の楽しみ」 青弓社
デヴィッド・デュバル著 小藤隆志 訳 2001 「ホロヴィッツの夕べ」 青土社
デヴィッド・デュバル著 横山一雄 訳 1992 「ピアニストとのひととき（下）」 音楽之友社

参考資料

- アラン・ヴァイス 採譜 1968 リスト＝ホロヴィッツ：ハンガリー狂詩曲第15番（未出版）
高久 暁 高沖秀明 著 2000 「マルク＝アンドレ・アムラン ピアノリサイタル」プログラム
高久 暁 著 2001 「コンスタンティン・シチュエルバコフ ピアノリサイタル」プログラム
夏井 睦 作 超絶技巧的ピアノ編曲の世界 <http://www.ne.jp/asahi/piano/natsui/index.htm>
福田直樹 採譜 ビゼー＝ホロヴィッツ カルメンの主題による変奏曲（1978年版）（未出版）

音源（CD・VIDEO）

- Cyprien Katsaris 1992 「MOZARTIANA」 SK 52551 SONY RECORDS
Steven Mayer 1991 「LISZT vs THALBERG」 783 ASV
Valery Kuleshov 2000 「HOMMAGE A HOROWITZ」 BIS-CD-1188
Vladimir Horowitz 1999 「HOROWITZ The Indispensable」 74321 634712 BMG
東 誠三 1999 「ラ・カンパネッラ-リスト名曲集-」 TYMK-013 EPSON
アルカディ・ヴォロドス 1997 「ヴォロドス・デビュー」 SRCR 1888 SONY RECORDS
ウラディミール・ホロヴィッツ 1990 「アンコール」 GD 87755 RCA Victor
コンスタンティン・シチュエルバコフ 1997 「超絶の円舞曲」 TOCE-9544 EMI
ワレリー・クレシヨフ 1992 「ホロヴィッツの再来 天才クレシヨフ・リサイタル」 VICC-81 Victor